

# 原水爆禁止2009年 世界大会報告書

原水爆禁止2009年世界大会には、7,000人が参加しました。三八地区からは、菊池一文さん(八戸医療生協)と阿部裕太さん(県国公代表・全労働八戸職安分会)が参加しました。

オバマ大統領のプラハ演説は、核兵器のない世界をめざす国際世論を盛り上げ、大会・分科会討議にそのことが反映していたそうです。大会では、2010年春のNPT(核不拡散条約)再検討会議を核兵器のない世界への転換点にと、署名運動のいっそうの推進を誓いました。

2009年10月、国連総会第1委員会で日本が提案(米国が共同提案国)した「核兵器の全面廃絶に向けた新たな決意」が採択されています。また、核兵器完全廃絶の実現を求める「新アジェンダ連合」提案の「核兵器のない世界に向けて 核軍縮の約束実行の加速を」の決議も採択されました。世界の情勢・世論が大きく動いている今、唯一の被爆国としての日本政府の取り組みと共に、草の根からの核兵器廃絶の運動が大切になっていると思います。

皆様のご協力に感謝しつつ、国民平和大行進や原水爆禁止世界大会、八戸原水爆禁止の会の活動の概要を報告いたします。



## 原水爆禁止2009年世界大会長崎報告

菊池一文(八戸医療生活協同組合)

8月6日から8月9日の日程で、原水爆禁止2009年世界大会に参加した。今年の世界大会は長崎ということもあり、予想通りの気温の高さで、最高気温は38°Cにも達するまさに「熱い」世界大会であった。総参加者7000名、世界25カ国から85名、各政府機関から10名という大規模なセレモニーにただ圧倒された。こんなにも多くの方が、原水爆に反対し、集っている姿を見るのは、唯一の被爆国の人間としても心強いものがあつた。青森県からは総勢16名、半数以上が20代と、非常に勢いのあるメンバーで構成されていたと感じる。民医連関係の方は16名中9名とかなり多く、平和に対しての意識の高さを改めて実感した。

今回の世界大会を通して感じたことは、世界各国、全国各地域での様々な取り組みが積極的に行われているということと、核兵器廃絶に関して今年は特に重要な年になるであろうということだ。開会総会や分科会でも繰り返し強調されていたのが、今年4月のプラハ演説についてであり、オバマ大統領の発言は核兵器廃絶に関して、かなり期待を持たせるものとなった。米ロ協定でも核兵器削減に関して、具体的な数字が挙げられているのも、大きな進歩であると感じる。しかし、開会総会で米国代表のジャッキー・カバソ氏が「核がある限り、抑止力は存在する。そして、その構造と利権は変化しない。」と述べていたが、それについては非常に共感できた。「核兵器削減」は必要ではあるが、あくまでそれは通過点であり、追求されるは「核兵器廃絶」なのだ。構造と利権に関しては、オバマ大統領と軍事産業の対立について発言される方もおり、核兵器廃絶に関してはかなりの時間を要する可能性はある。ただ、それを悲観するのではなく、少しの進歩でも着実に廃絶への道を歩んでいけるようにわれわれが活動していかななくてはならないと思う。

長崎市長も「国が核廃絶に動かないのなら、市民レベル、NGOレベルでの活動が必要」と述べていた。各地域での活動は大変小さなものかもしれないが積極的に行い、その活動をメジャーに押し上げる必要があると強く感じる。分科会の時に長野代表の方が発言されていたことだが、「それぞれの地域での小さな活動が、大きな力に立ち向かっているということはとてもかっこいいことではないか…」、冗談も踏まえながら発言されたこととは思うが、我々のような小さな団体でも、多くの仲間と協力することによって、国を動かしていけるかもしれない、そういう気持ちを与えてくれる発言であり、とても力づけられた。

世界大会の合間の戦跡めぐりでは、現地の平和委員会の方をボランティアに迎え、原爆落下地点や城山小学校、平和公園、原爆資料館などをめぐった。特に印象に残っているのが、平和公園内にある石碑に刻まれた言葉だ。「…のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくて、とうとう、あぶらの浮いたまま飲みました。(あの日のある少女の手記から)」、戦争の最大の被害者は罪のない子供達であるということを強く感じた。このような思いを二度とさせないためにも、来年予定されているNPT再検討会議では、核廃絶に向けた討論が大きく前進し、現在盛んに議論されている9条「改正」には断固として反対していかななくてはならない。

今後の自分の活動としては、八戸医療生活協同組合での報告はもちろんのこと、「八戸原水爆禁止の会」や県連反核平和委員会青年グループ(ピースメイト)での報告、6・9行動での街頭演説などを行っていきたいと考えている。また、毎年春に行っている「県連新入職員平和学校」(新入職員を対象とした民医連平和啓蒙活動の一環)でのレポート報告なども行い、1人でも多くの職員に平和活動の重要性を分かってもらいたいという思いがある。長崎に行き、生の声や現状を見てきたものとして、これを広めることはとても重要であるとともに、大きな転機であると感じる。

## 充実した時間を過ごしました

阿部裕太(県国公・全労働八戸職安分会所属)

私は今回、労働組合の活動の一環として、3泊4日で「原水爆禁止世界大会2009」に参加させていただきました。高校の修学旅行で広島原爆ドームを見学しに行ったこともあり、原水爆について改めて触れられる良い機会だと思い参加を希望しました。

初日は移動ということで、空港のロビーに集合はしたものの、女性が多くて正直話しかけにくく感じてしまいました(笑)。ほぼ一日を駆けつけて青森から長崎へ移動し、当然の事ながら疲れしました。他の方々もぐったり。

二日目は碑めぐりをしたり、被爆の跡や当時の写真、原水爆をテーマにした絵画などを見て「日本が『唯一』の被爆国なんだ」と改めて考えさせられました。組合から託された千羽鶴を持って平和公園にも行きました。私たちの他にも大勢の人が千羽鶴を持ってきていて、「平和を願う人たちは団結しあって、こんなにも積極的に行動しているんだ」と感じました。私は安易な気持ちで参加していたと反省させられました。文化ホールにて開催された『原水爆禁止世界大会2009』では、各国から代表巻が参加していて、規模が想像よりも遥かに大きく圧倒されました。『平和』という一つの目標に向かって世界で協力しあうことは素晴らしいことで、『平和』を実現させるには必要不可欠なものだと感じました。

翌日の三日目には分科会が行われました。私が参加した分科会では、『各都道府県・自治体で、どのような活動に取り組んでいるか』というテーマで討論しました。ある県では外国船を入港させる際、核に関わっていない事を証明する『誓約書』にサインさせるなどの取り組みを実施していました。他にも様々な活動報告があり、平和を願う大きな取り組みが各都道府県・自治体でされていることを知りました。

四日目は移動に時間がかかるため、大会に少しだけ黙祷を捧げ、会場をあとにしました。

今回、『原水爆禁止世界大会2009』に参加させていただき、豊富な知識や経験を得ることができたと感じています。平和という意味を改めて考えさせられる4日間でした。そして、一緒に参加した医労運の方々と交流を深めることができ、楽しく充実した時間を過ごすことができました。

## 資料1 原水爆禁止2009年世界大会—長崎決議

### 長崎からのよびかけ

「長崎を最後の被爆地に」「核兵器をなくせ」—被爆者は、苦しみのなかで、世界に訴えつづけました。その声は世界の圧倒的な世論となり、国際政治を動かしています。

アメリカのオバマ大統領が「核兵器のない世界の平和と安全を追求する」と宣言し、新たな展望が開かれました。

いまこそ行動のときです。被爆者とともに、核兵器廃絶を求める声を世界に広げてきた日本の原水爆禁止運動が、その力を発揮するときです。

日本政府は、被爆国でありながら、アメリカの「核の傘」にあくまで固執し、核兵器廃絶の実現にも消極的態度をとりつづけています。「核密約」で核兵器持ち込みを容認し、「非核3原則」を裏切ってきたことも隠し通すつもりです。

核兵器のない世界にむけ、被爆国としての責任を果たす日本、非核平和の日本を、なんとしてもつくりだしましょう。

被爆国の私たち一人ひとりが、核兵器の廃絶を求める圧倒的な世論と運動を巻き起こすことを決意し、

以下の行動にとりくむようよびかけます。

- 核不拡散条約(NPT)再検討会議で、核保有国をはじめ、すべての政府が核兵器全面禁止・廃絶条約の締結への一步を踏み出すよう強く求めましょう。世界の先頭に立ち、「核兵器のない世界を」国際署名を地域、職場、学園でいっそう大きく広げましょう。広範な人びとと共同し、1200万筆の目標を達成しましょう。来年5月のニューヨーク大行動に全国各地から代表を送り、NPT再検討会議に日本と世界の人びとの願いをこめた署名を積み上げましょう。
- 核兵器廃絶と「非核3原則」の厳守を政府に迫る「非核日本宣言」の運動を、全国各地でさらに広げましょう。「核密約」の公表・破棄、「核の傘」からの離脱をかちとりましょう。米軍基地再編強化や自衛隊海外派兵に反対し、憲法9条を守り生かす運動をいっそう広げましょう。米軍への「思いやり予算」や軍事費の削減、いのち・くらし・雇用を守る運動を強めましょう。
- 被爆者がいのちがけでたたかってきた原爆症認定集団訴訟は、ついに政府を迫りつめて、解決への道筋を示す確認書の合意に至りました。訴訟の全面解決と被爆実態に見合った認定行政への転換を確実に実行させましょう。被爆者の願いを継承・発信し、被爆の実相をつぎの世代と世界に伝える証言活動や原爆展に、全国各地でとりくみましょう。青年たちの創意とエネルギーにあふれる行動は、未来への希望です。核兵器のない世界の扉を開くため、被爆者とともに、若い世代とともに、いまこそ声を合わせましょう。

ノーモア・ヒロシマ！ ノーモア・ナガサキ！ ノーモア・ヒバクシャ！

2009年8月9日

原水爆禁止2009年世界大会—長崎

## 資料2 平成21年長崎平和宣言

今、私たち人間の前にはふたつの道があります。

ひとつは、「核兵器のない世界」への道であり、もうひとつは、64年前の広島と長崎の破壊をくりかえす滅亡の道です。

今年4月、チェコのプラハで、アメリカのバラク・オバマ大統領が「核兵器のない世界」を目指すと言いました。ロシアと戦略兵器削減条約 (START) の交渉を再開し、空も、海も、地下も、宇宙空間でも、核実験をすべて禁止する「包括的核実験禁止条約」(CTBT) の批准を進め、核兵器に必要な高濃縮ウランやプルトニウムの生産を禁止する条約の締結に努めるなど、具体的な道筋を示したのです。「核兵器を使用した唯一の核保有国として行動する道義的な責任がある」という強い決意に、被爆地でも感動がひろがりました。

核超大国アメリカが、核兵器廃絶に向けてようやく一步踏み出した歴史的な瞬間でした。

しかし、翌5月には、国連安全保障理事会の決議に違反して、北朝鮮が2回目の核実験を強行しました。世界が核抑止力に頼り、核兵器が存在するかぎり、こうした危険な国家やテロリストが現れる可能性はなくなりません。北朝鮮の核兵器を国際社会は断固として廃棄させるとともに、核保有5カ国は、自らの核兵器の削減を進めるべきです。アメリカとロシアはもちろん、イギリス、フランス、中国も、核不拡散条約 (NPT) の核軍縮の責務を誠実に果たすべきです。

さらに徹底して廃絶を進めるために、昨年、潘基文国連事務総長が積極的な協議を訴えた「核兵器禁止条約」(NWC) への取り組みを求めます。インドやパキスタン、北朝鮮はもちろん、核兵器を保有すると

いわれるイスラエルや、核開発疑惑のイランにも参加を求め、核兵器を完全に廃棄させるのです。

日本政府はプラハ演説を支持し、被爆国として、国際社会を導く役割を果たさなければなりません。また、憲法の不戦と平和の理念を国際社会に広げ、非核三原則をゆるぎない立場とするための法制化と、北朝鮮を組み込んだ「北東アジア非核兵器地帯」の実現の方策に着手すべきです。

オバマ大統領、メドベージェフ・ロシア大統領、ブラウン・イギリス首相、サルコジ・フランス大統領、胡錦濤・中国国家主席、さらに、シン・インド首相、ザルダリ・パキスタン大統領、金正日・北朝鮮総書記、ネタニヤフ・イスラエル首相、アフマディネジャド・イラン大統領、そしてすべての世界の指導者に呼びかけます。

被爆地・長崎へ来てください。

原爆資料館を訪れ、今も多くの遺骨が埋もれている被爆の跡地に立ってみてください。1945年8月9日11時2分の長崎。強力な放射線と、数千度もの熱線と、猛烈な爆風で破壊され、凄まじい炎に焼き尽くされた廃墟の静寂。7万4千人の死者の沈黙の叫び。7万5千人もの負傷者の呻き。犠牲者の無念の思いに、だれもが心ふるえるでしょう。

かろうじて生き残った被爆者にも、みなさんは出会うはずです。高齢となった今も、放射線の後障害に苦しみながら、自らの経験を語り伝えようとする彼らの声を聞くでしょう。被爆の経験は共有できなくても、核兵器廃絶を目指す意識は共有できると信じて活動する若い世代の熱意にも心うごかされることでしょう。

今、長崎では「平和市長会議」を開催しています。来年2月には国内外のNGOが集まり、「核兵器廃絶一地球市民集会ナガサキ」も開催します。来年の核不拡散条約再検討会議に向けて、市民とNGOと都市が結束を強めていこうとしています。

長崎市民は、オバマ大統領に、被爆地・長崎の訪問を求める署名活動に取り組んでいます。歴史をつくる主役は、私たちひとりひとりです。指導者や政府だけに任せておいてはいけません。

世界のみなさん、今こそ、それぞれの場所で、それぞれの暮らしの中で、プラハ演説への支持を表明する取り組みを始め、「核兵器のない世界」への道を共に歩んでいこうではありませんか。

原子爆弾が投下されて64年の歳月が流れました。被爆者は高齢化しています。被爆者救済の立場から、実態に即した援護を急ぐように、あらためて日本政府に要望します。

原子爆弾で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りし、核兵器廃絶のための努力を誓い、ここに宣言します。

2009年（平成21年）8月9日

長崎市長 田上 富久

## 2009年国民平和大行進

一日目(6/4)

6月4日、上十三地区からの平和行進が八戸に到着しました。例年通り三八教育会館で待ち、すぐ市内行進を行いました。今年は昨年よりも参加者が増え、行進の列が長くなりました。顔見知りの市民劇場のひとが、知ってる人が多いので一緒に歩いていきますと列に加わりました。仕事を終えて合流する人もいて、引き継ぎ会場到着時は130人を超えていました。

市民広場の引き継ぎ集会では、リレー旗やのぼりを引き継いだ後、上十三地区・苦米地氏が通過市町村



の首長・議長から「核兵器のない世界を」署名が寄せられたことを紹介しました。三八地区・内田氏は、三八地区では非核日本宣言の取り組み(5市町村で意見書が採択されている)がすすんでいることを紹介しました。

市長、議長のメッセージが読み上げられ、最後にうみねこ合唱団のリードで原爆を許すまじをみんなで歌いました。なお、議長からは「核兵器のない世界を」署名もいただきました。

雨の中の行進、集会でしたので事務局担当として頭が下がる思いです。医療生協&八医労(八戸医療生協労組)は50名を超える参加でした。職安分会、年金者組合、新婦人、全法務のみなさんも多数の参加でした。

## 二日目(6/5)

今日は、市庁から司法センターまで、南部町・孔明荘あたりから役場まで、三戸町入り口の橋のあたりから町役場までを歩きました。全部で7kmくらいです。雨はたいしたことはありませんでした。南部町ではペナントに町長直筆の署名をいただきました。南部町は全国に3町あるので「青森県南部町」と記入したと話していました。署名はいち早く、昨年末に送っていただきました。三戸町では、町長さんから「核兵器のない世界を」署名もいただきました。

田子町は宣伝カーだけの訪問で行進は行いませんでした。3町それぞれで、賛助金の協力をいただきました。

## 三日目(6/6)

平和行進三日目の6月6日、例年と違って五戸町と新郷村の行進を実施しました。

雨は落ちていましたが、横断幕とリレー旗、胸のゼッケンで核兵器廃絶を訴えました。行進団20人程度に移動用の車列が続きました。五戸町では日本共産党・赤坂町議、新郷村では日本共産党・山岸村議で



行進に加わりました。

三戸町役場で、青森・八戸からの参加者と合流して行進しました。

金田一温泉駅前には予定より早く到着したのですが、岩手県側がすでに待っていたので、そのまま行進し、13時50分に引き継ぎました。

引継集会では、内田県原水協代表理事(八戸医療生協・副理事長)が三八での行進と非核都

写真は五戸町での平和行進



写真は金田一温泉駅に向かう青森県行進団

市宣言や非核日本宣言の取り組みを紹介、岩手県側からは市町村合併後の取り組みで県内全ての自治体で非核都市体宣言を採択していることが紹介されました。参加者は青森県側は30人余、岩手県側は20人余でしたが、子どもたちも平和行進に参加しているのが印象的でした。



三戸町役場で(ピンぼけは雨のせいです)

6/9 追記 報道によると岩手の行進団は40人ということでした。予定より早い出発となったので駅前では少なかったのでしょうか。石切所公民館まで7kmのみちのりを歩いたそうです。

6/10 追記 6/9に階上町、五戸町、新郷村を訪問し賛助金のご協力を、階上町長と新郷村長からは「核兵器のない世界を」署名もいただきました。今回の行進では、市議会議長と三戸町長からの署名もいただいています。昨年の南部町長の署名と合わせて首長・議長の署名は5名となりました。

三八地区の平和行進は、今年の目標は「三日間で200人を超える参加者を」でしたが、事務局の集計では199名、目標は達成されたと考えていいと思います。

### 資料3 バラク・オバマ大統領のフラチャニ広場（プラハ）での演説

2009年4月5日、チェコ共和国プラハ（抄）

Now, one of those issues that I'll focus on today is fundamental to the security of our nations and to the peace of the world -- that's the future of nuclear weapons in the 21st century.

The existence of thousands of nuclear weapons is the most dangerous legacy of the Cold War. No nuclear war

was fought between the United States and the Soviet Union, but generations lived with the knowledge that their world could be erased in a single flash of light. Cities like Prague that existed for centuries, that embodied the beauty and the talent of so much of humanity, would have ceased to exist.

Today, the Cold War has disappeared but thousands of those weapons have not. In a strange turn of history, the threat of global nuclear war has gone down, but the risk of a nuclear attack has gone up. More nations have acquired these weapons. Testing has continued. Black market trade in nuclear secrets and nuclear materials abound. The technology to build a bomb has spread. Terrorists are determined to buy, build or steal one. Our efforts to contain these dangers are centered on a global non-proliferation regime, but as more people and nations break the rules, we could reach the point where the center cannot hold.

Now, understand, this matters to people everywhere. One nuclear weapon exploded in one city -- be it New York or Moscow, Islamabad or Mumbai, Tokyo or Tel Aviv, Paris or Prague -- could kill hundreds of thousands of people. And no matter where it happens, there is no end to what the consequences might be -- for our global safety, our security, our society, our economy, to our ultimate survival.

Some argue that the spread of these weapons cannot be stopped, cannot be checked -- that we are destined to live in a world where more nations and more people possess the ultimate tools of destruction. Such fatalism is a deadly adversary, for if we believe that the spread of nuclear weapons is inevitable, then in some way we are admitting to ourselves that the use of nuclear weapons is inevitable.

Just as we stood for freedom in the 20th century, we must stand together for the right of people everywhere to live free from fear in the 21st century. (Applause.) And as nuclear power -- as a nuclear power, as the only nuclear power to have used a nuclear weapon, the United States has a moral responsibility to act. We cannot succeed in this endeavor alone, but we can lead it, we can start it.

So today, I state clearly and with conviction America's commitment to seek the peace and security of a world without nuclear weapons. (Applause.) I'm not naive. This goal will not be reached quickly -- perhaps not in my lifetime. It will take patience and persistence. But now we, too, must ignore the voices who tell us that the world cannot change. We have to insist, "Yes, we can." (Applause.)

Now, let me describe to you the trajectory we need to be on. First, the United States will take concrete steps towards a world without nuclear weapons. To put an end to Cold War thinking, we will reduce the role of nuclear weapons in our national security strategy, and urge others to do the same. Make no mistake: As long as these weapons exist, the United States will maintain a safe, secure and effective arsenal to deter any adversary, and guarantee that defense to our allies -- including the Czech Republic. But we will begin the work of reducing our arsenal.

To reduce our warheads and stockpiles, we will negotiate a new Strategic Arms Reduction Treaty with the Russians this year. (Applause.) President Medvedev and I began this process in London, and will seek a new agreement by the end of this year that is legally binding and sufficiently bold. And this will set the stage for further cuts, and we will seek to include all nuclear weapons states in this endeavor.

To achieve a global ban on nuclear testing, my administration will immediately and aggressively pursue U.S. ratification of the Comprehensive Test Ban Treaty. (Applause.) After more than five decades of talks, it is time for the testing of nuclear weapons to finally be banned.

And to cut off the building blocks needed for a bomb, the United States will seek a new treaty that verifiably ends the production of fissile materials intended for use in state nuclear weapons. If we are serious about stopping the spread of these weapons, then we should put an end to the dedicated production of weapons-grade materials that create them. That's the first step.

Second, together we will strengthen the Nuclear Non-Proliferation Treaty as a basis for cooperation.



The basic bargain is sound: Countries with nuclear weapons will move towards disarmament, countries without nuclear weapons will not acquire them, and all countries can access peaceful nuclear energy. To strengthen the treaty, we should embrace several principles. We need more resources and authority to strengthen international inspections. We need real and immediate consequences for countries caught breaking the rules or trying to leave the treaty without cause.

And we should build a new framework for civil nuclear cooperation, including an international fuel bank, so that countries can access peaceful power without increasing the risks of proliferation. That must be the right of every nation that renounces nuclear weapons, especially developing countries embarking on peaceful programs. And no approach will succeed if it's based on the denial of rights to nations that play by the rules. We must harness the power of nuclear energy on behalf of our efforts to combat climate change, and to advance peace opportunity for all people.

[http://www.whitehouse.gov/the\\_press\\_office/Remarks-By-President-Barack-Obama-In-Prague-As-Delivered/](http://www.whitehouse.gov/the_press_office/Remarks-By-President-Barack-Obama-In-Prague-As-Delivered/)

今日私が重点を置いてお話しする課題のひとつは、この両国の安全保障にとって、また世界の平和にとって根本的な課題、すなわち21世紀における核兵器の未来、という問題です。

何千発もの核兵器の存在は、冷戦が残した最も危険な遺産です。米国とソ連の間に核戦争が起きることはありませんでしたが、何世代にもわたり人々は、この世界が一瞬の閃光（せんこう）の下に消失してしまうこともあり得ると承知の上で生活していました。プラハのように何世紀にもわたって存在し、人類の美しさと才能を体現した都市が消え去ってしまう可能性があります。

今日、冷戦はなくなりましたが、何千発もの核兵器はまだ存在しています。歴史の奇妙な展開により、世界規模の核戦争の脅威が少なくなる一方で、核攻撃の危険性は高まっています。核兵器を保有する国家が増えています。核実験が続けられています。闇市場では核の機密と核物質が大量に取引されています。核爆弾の製造技術が拡散しています。テロリストは、核爆弾を購入、製造、あるいは盗む決意を固めています。こうした危険を封じ込めるための私たちの努力は、全世界的な不拡散体制を軸としていますが、規則を破る人々や国家が増えるに従い、この軸が持ちこたえられなくなる時期が来る可能性があります。

これは、世界中のあらゆる人々に影響を及ぼします。ひとつの都市で1発の核兵器が爆発すれば、それがニューヨークであろうとモスクワであろうと、イスラマバードあるいはムンバイであろうと、東京、テルアビブ、パリ、プラハのどの都市であろうと、何十万もの人々が犠牲となる可能性があります。そして、それがどこで発生しようとも、世界の安全、安全保障、社会、経済、そして究極的には私たちの生存など、その影響には際限がありません。

こうした兵器の拡散を抑えることはできない、私たちは究極の破壊手段を保有する国家や人々がますます増加する世界に生きる運命にある、と主張する人もいます。このような運命論は、極めて危険な敵です。なぜなら、核兵器の拡散が不可避であると考え、ある意味、核兵器の使用が不可避であると認めることになるからです。

私たちは、20世紀に自由のために戦ったように、21世紀には、世界中の人々が恐怖のない生活を送る権利を求めて共に戦わなければなりません。そして、核保有国として、核兵器を使用したことがある唯一の核保有国として、米国には行動する道義的責任があります。米国だけではこの活動で成功を取めることはできませんが、その先頭に立つことはできます。その活動を始めることはできます。

従って本日、私は、米国が核兵器のない世界の平和と安全を追求する決意であることを、信念を持って

明言いたします。私は甘い考えは持っていません。この目標は、すぐに達成されるものではありません。おそらく私の生きていくうちには達成されないでしょう。この目標を達成するには、忍耐と粘り強さが必要です。しかし今、私たちは、世界は変わることができないという声を取り合ってははいけません。「イエス・ウィ・キャン」と主張しなければならないのです。

では、私たちが取らなければならない道筋を説明しましょう。まず、米国は、核兵器のない世界に向けて、具体的な措置を取ります。冷戦時代の考え方に終止符を打つために、米国は国家安全保障戦略における核兵器の役割を縮小し、他国にも同様の措置を取ることを求めます。もちろん、核兵器が存在する限り、わが国は、いかなる敵であろうとこれを抑止し、チェコ共和国を含む同盟諸国に対する防衛を保証するために、安全かつ効果的な兵器を維持します。しかし、私たちは、兵器の保有量を削減する努力を始めます。

米国は今年、弾頭と備蓄量を削減するために、ロシアと、新たな戦略兵器削減条約の交渉を行います。メドベージェフ大統領と私は、ロンドンでこの作業を開始しました。そして今年末までには、法的拘束力を持ち、十分に大胆な新しい合意を目指す予定です。これは、さらなる削減に向けた準備段階となるものであり、この努力にすべての核兵器保有国を参加させることを目指します。

全世界的な核実験の禁止を実現するために、私の政権は、米国による包括的核実験禁止条約の批准を直ちに、積極的に推し進めます。この問題については50年以上にわたって交渉が続けられていますが、今こそ、核兵器実験を禁止する時です。

そして、核爆弾の製造に必要な物質の供給を断つために、米国は、国家による核兵器製造に使用することを目的とする核分裂性物質の生産を、検証可能な形で禁止する新たな条約の締結に努めます。核兵器の拡散阻止に本気で取り組むのであれば、核兵器の製造に使われる兵器級物質の製造を停止すべきです。これが初めの1歩です。

第2に、私たちは共に、協力の基盤として、核不拡散条約を強化します。

条約の基本的な内容は、理にかなったものです。核保有国は軍縮へ向かって進み、核兵器を保有しない国は今後も核兵器を入手せず、すべての国々に対し原子力エネルギーの平和利用を可能にする、という内容です。不拡散条約を強化するために私たちが受け入れるべき原則がいくつかあります。国際的な査察を強化するための資源と権限の増強が必要です。規則に違反していることが発覚した国や、理由なしに条約を脱退しようとする国が、即座に実質的な報いを受けるような制度が必要です。

そして、私たちは、各国が、拡散の危険を高めることなく、平和的に原子力エネルギーを利用できるようにするために、国際燃料バンクなど、原子力の民生利用での協力に関する新たな枠組みを構築すべきです。これは、核兵器を放棄するすべての国、特に原子力の平和利用計画に着手しつつある開発途上国の権利でなければなりません。規則に従う国家の権利を拒否することを前提とする手法は、決して成功することはありません。私たちは、気候変動と戦い、すべての人々にとって平和の機会を推進するために、原子力エネルギーを利用しなければなりません。